



平成28年10月31日 しが盲ろう者友の会にて

岡田 昌也さん

(NPO法人しが盲ろう者友の会 (①) 理事長)

一歳の頃、高熱のために耳が聞こえなくなり、その後目も見えなくなり、中学一年生から高校二年生までの五年間は寄宿舎で過ごされました。高校卒業後は、一般企業(段ボール製造会社)に就職。しかし、母親の病気が悪化したことから辞職を余儀なくされます。その後、しが盲ろう者友の会の立ち上げに関わられ、現在は同会の理事長を務めておられます。また、多方面から依頼があり、通訳・介助者(②)とともに出向き、各地で講演も行っておられます。平成二八年度第七回全国盲ろう者体験作文コンクールでは、「私の歩み」で入賞されました。

見えない、聞こえない、どうしたらいいんだ

齊藤 今日はお時間をいただきありがとうございます。ごさいます。まず、これまでの生い立ちについてお聞かせいただけますか。

岡田 一歳の頃、病気で高熱が出ました。その当時は大きい病院はなく小さな病院だけでした。生きるか死ぬかの状態で、結果耳が聞こえなくなったと両親から聞きました。目の方は軽く見えない程度だったんですが、小学校四年生の六月頃、手術をしました。けれども、視野も狭くなって視力もだんだん落ちていって、ぼやあつとするような状態になりました。二六歳の時にレンズを入れる手術もしましたが、視力は弱いままでした。今は、明るい暗い等少し感じられますが、残念ながら人の顔とかはわからないです。齊藤 学校生活の思い出は？

岡田 小学校三年までは右目の視力は少し残っていましたので、楽しいことはテレビを見ることでした。また、今は

①NPO法人しが盲ろう者友の会・・・平成一三年七月、しが盲ろう者友の会設立平成一五年四月、NPO法人を取得。県の委託事業として、盲ろう者通訳・介助者の養成、登録、派遣、研修を行う。盲ろう者、盲ろう者の家族への相談支援、盲ろう者の生活訓練も行っている。

触手話(③)をしています。その頃は少し離れた所でも口の形を読み取れましたし、表情もわかったので、友だちと話すのがとても楽しかったです。他には、絵を見るのも好きでした。でも、それ以降、暗くなって(見えづらくなつて)、コミュニケーションもできなくなつて、同級生や下級生が話しているんですが、何を言っているかわからないので、怒って暴力をふるわれたりとか、いじめにもあつてとてもつらい思いをしていました。また、人とすれ違う時にもぶつかつて、相手によく怒られることがありました。

本当に情報がないので、何を言ってるかわからない、見えない、聞こえない、どうしたらいいんだというので、とても苦しい思いをしてきました。家の中では母とも話が通じなくなつて怒られたり、肩を叩かれたり、外へ出されて鍵を閉められたりもして、大変でした。

齊藤 目が見えなくなつてから、コミュニケーションで困ることがたくさんあつたと思うんですが、何かのきっかけ、手段でそれは改善されましたか。

②通訳・介助者・・・盲ろう者が周囲と円滑にコミュニケーションをとったり、安心して安全に外出したりできるようなサポートや、必要な情報を提供すること等を業務とする。

③触手話・・・相手が示す手話を直接触り読み取る。

岡田 怒られても我慢してたんですが、母が手のひら書き(④)をしてくれて、通じるようになりました。その他、体に触れたりとか、そういうことを通して母とのコミュニケーションがスムーズになりました。

齋藤 友だちとはどうでしたか。

岡田 手術をした後は長いこと休んでまして、夏休みに久しぶりに友だちと会ったらいじめもなく、周りのみんなが助けてくれるようになりました。私が母と一緒に手のひら書きをしている様子を見て、それを真似して手のひら書きでコミュニケーションを取るようになりました。

齋藤 中学生からは寄宿舎で過ごされたということですが、そこでの思い出と言えば？

岡田 (笑) 恥ずかしいんですが、小学校までは母に頼っていました。でも、寄宿舎は一人で入らないといけないというので、夜、食事中に会話もなく、とてもさびしくなっていて泣いてしまいました。それで、先輩に、「今までお前はお母さんを頼りすぎてただろう」「お母さんに頼るな」「自立していかないといけない」などと諭されました。三つ上のろうの先輩なんですけど、他の友だちが私をいじめる時はいつも助けてくださったりもしました。その先輩とよく行動をともにしていました。

齋藤 いい先輩に出会えましたね。

岡田 はい、そうですね。

齋藤 中、高と寄宿舎で過ごされていたんですか。

岡田 中学部一年から高等部二年まで寄宿舎に入り、高三からは家から通いました。

齋藤 それは、どういうきっかけですか。

岡田 言いくいんですが、五年間、寄宿舎での生活に慣れるうちにとても厳しくなってきたんです。いろんな規則がありますし、あと、試験があるんですが、試験前には夜遅くまで勉強をしろうとするさく言われて嫌でした(笑)。寄宿舎の時は落ち着けなかったのですが、家にいる時は落ち着くことができました。

本当は働き続けたかったのですが、すごく悩みました・・・

齋藤 高校を出られて、就職されたということですが。

岡田 会社はいろいろ探したんですが、盲ろうの人が通うのは問題である、と。会社の中にはいろいろ機械があるし、もし機械で何か切断とか怪我になった場合、会社の社長としては重大な責任になってしまおうということで断られたこともあり。ようやく、一緒に仕事の様子とかを見てもらって、これなら大丈夫ということで私を雇ってくれる所が見つかりました。でも、母親と一緒に通勤するというの

が条件でした。

齋藤 段ボールの製造会社ということですが、具体的にどんなお仕事をされていたのでしょうか。

岡田 段ボールの組み立てと箱詰め、あとは機械のカスタムを取る仕事もしていました。社長が様子を見て、周りの聞こえる人たちは楽しそうに話をしながら仕事をしてるんだけど、盲ろう者は見えない、聞こえないから集中して仕事をしているからどうも技術が高いみたいだと言って、社長とか部長とか課長とかがいるんな忙しい部署に私を引っ張っていくので、あちこち行っていました。

齋藤 引っ張りだこ、すごいですね。一五年間勤められて、お母さんが体調不良になられたことで仕事をお辞めになったということですが、その時はどんなお気持ちでしたか。

岡田 母親の体調が悪くて仕事を辞めなければならぬということ、すごくショックだったんです。でも、辞めて無職になって家にひきこもってしまうのは嫌でした。本当は働き続けたかったのですが、すごく悩みました。母の体調が悪くて仕事を辞めるんだということを友だちに打ち明けた時、友だちもびっくりしていました。一緒に聴覚障害者セ

ンターに相談に行きましたが、手話通訳もないしどうしたらいいか、いろいろ限界で、相談してもだめだということ、家でひきこもるような状況になってしまいました。

齋藤 お母さんは、通勤時の車の運転の他に、どんなことを職場でお手伝いされていたんですか。

岡田 私は正社員で、母はパートとして採用されていて、同じ作業を一緒にしていました。指示書みたいなのがあって、いつまでに終わるかとか、数がどれくらいかとか、その仕事が終わったら次は何をするかとか、そういった説明を母がしてくれました。

山本 やはり、職場でも通訳・介助者さんを求める声は多いでしょうか。

岡田 母親と一緒に長い期間通っていましたけれども、母親も大変だった、非常に疲れたと思います。会社の中で、ろうの人には手話通訳者が、盲ろう者の場合は通訳・介助者が必要です。新聞にも、盲ろう者も生活していくためにはお金が必要だし、お金のためにはきちっと働く、給与保障も必要だ、そのためには職場が必要だという記事がよく載っています。

④手のひら書き・・・盲ろう者の手のひらに指先等でひらがなやカタカナ、漢字等を書いて言葉を伝える方法。盲ろう者の指をとり、机や手のひらの上に一字ずつ書いていくという方法もある。手話がわからない人と話す時や、漢字を伝える時等に使用。

友の会と出会って・・・

齋藤 岡田さんが友の会活動を始めたきっかけはどのようなことでしょうか。

岡田 仕事を辞めた後、仕事がない状態が続いていました。そんな時、友の会の準備会が始まっているということ、どうしようかな、通訳・介助者もいないし、迷ってちよつと遠慮してたんですが、たまたま友だちと聴覚障害者センターに行った時に、少しずつ進めたらいいと職員の方から言われたんです。それでやろうかなと思いました。

齋藤 設立当時のメンバーに、岡田さんは入っておられたんですか。

岡田 そうですね。設立前の準備会の時は意見が合わなくていろいろもめて一時離れた人もいるんですが、また戻ってきて友の会として一緒に活動を始めました。設立当初の支援者の中には続けられなくなった人もいますが、盲ろう者は今も当時のメンバーが六人とも残っています。

齋藤 友の会には、何人の方が所属されていますか。

岡田 今、盲ろう者の数は二人ですが、積極的に活動している人は八人くらいです。

齋藤 具体的に友の会ではどんな活動をされているか、詳しくお聞かせください。

岡田 友の会活動として、交流、地域参加、学習、防災、機関紙発行を行っています。交流では、他府県の盲ろうの方を招いたり、またクリスマス会を開いたりもしています。地域参加では、毎年五月に彦根学園で学園祭があり、そこで焼きそばの販売とかもしていますし、手話フェスティバルというお祭りがある、そこでは触手話とか点字の体験教室を行っています。ステージでダンス等をみなさんに見ていただいたこともありました。あと、学習では、消防署の方に来ていただいて防災グッズを触ったりして防災の学習をしました。災害の避難訓練等の体験もしました。機関紙は年に三回の発行で、盲ろう者が経験したこととか、支援者が行事に参加した感想等を掲載しています。

将来のことを思ってよしやるぞ、と思いました

齋藤 友の会の活動の中で、岡田さんの役割はどういったことになりますか。

岡田 私も、理事長として五期目になるんですね。県からの委託事業として、派遣事業、生活訓練事業、相談事業、養成事業、研修事業、いろいろあります。どうしようかなという迷いがあった時は、私に報告していただいて理事会にかけ、相談して決定しています。また、防災会議とか、

近江八幡市の自立支援協議会等いろいろな会議に出席しています。

齋藤 理事長になられたきっかけは？

岡田 はじめは、理事を二年間務めました。もともと、他の県の方々の様子を見ていると、若い方ばかりなので、私も理事長になりたいなという思いは持っていました。また、理事をしていた二年間に、周りの人たちから、あなたは力があるんだから頑張れと言われたので、決意を固めて立候補しました。私が理事をしていた頃は能登川に事務所があったんですが、こちらへ引っ越してきた時には、将来のことを思ってよしやるぞ、と思いました。

齋藤 将来のことを思ってというのは？

岡田 盲ろう者の福祉は、まだまだ遅れている状態です。視覚障害の方々の制度に比べても、やっぱりまだ遅れているなと思います。視覚障害者の歴史、福祉は長く、制度としてはだいぶ昔からありますが、盲ろう者団体が活動を始めたのが二五年というまだ浅い歴史なんです。視覚障害者の人は、声が聞こえますので電話もできますし、スマホを使うこともできますが、盲ろう者にはそういう機器もないので、開発していききたいなとも思っています。今、点

字ができるペンディスプレイ^⑤というものがあるんですが、大きいのもう少し携帯できる小さいものがあったらいいと思います。家の方ではパソコンで情報が取れますが、パソコンは家にいる時しか使えません。また、テレビを見ることもできないので、点字で読み取れるものがあるといいと思います。テレビでは、災害の時にテロップが出ますが、私たちはそれが見えない、聞こえないのでとても不便です。とにかく、情報不足です。

あとは、まだまだひきこもっている方々もおられるので、一緒に活動していきたいと思っています。ひきこもられている方々をみなさん呼びびたいんですが、家族の問題もあります。また、盲ろう者自身も「友の会の存在」や、また「自分は盲ろう者なのかどうなのか」ということを知らない方もいらつしやるかもしれません。以前、市役所等にも聞きに行きましたが、やっぱり個人情報ということで教えてもらえませんでした。映像や新聞で呼びかけたりもするんですが、なかなか難しいので、何かいい方法があれば教えていただきたいです。

また、この事務所の建物がとても古いので、いずれは立派な建物にしたいと思っています。

⑤ペンディスプレイ・・・コンピュータの文字情報や図形情報等を、二次元に配列されたピンを上下させ、その凹凸により表示させる機器。

山本 今まで活動を続けてこられる中でいろいろご苦労もあつたと思うのですが、五期目というところで、理事長を続けるエネルギーの源となつていのは何でしょうか。

岡田 理事長をやる前にも、いろいろ勉強が必要です。前にろうあ協会で青年部の活動を長くしていました。その時の経験が今の理事長の活動にも役立っていると思いません。また、全国盲ろう者大会に参加したり、全国の団体の連絡協議会に参加したりして、他の人がいろいろ活動している様子を見て、自分もできる、自分と同じように頑張っている人が周りにたくさんいる、自分も頑張っていこうと思いました。理事長は大変ですけれども、通訳・介助者に頼るだけではなくて、いろいろと自分で考えて自分でやっていくことも必要だと思っています。

廣岡 幼少期に、周りに理解されないというつらい体験をされながらも、今お話をうかがっていると、すごくポジティブ、前向きでいらっしやるのは、もともと持ち合わせておられたものなのか、あるいはお母さんの存在、理解や支えがあつたことなのか、どうでしょう。

岡田 仕事を辞めようか悩んでいる時に、友だちから、とりあえず、ろうあ協会の青年部の活動があるのでそれを一緒にやったらどうかと勧められて、私はやりたかつたんですが、母親は反対だったんです。周りに迷惑をかけるから

家にいた方がいいのではないかと。それでストレスも溜まって、母親とケンカをするようにもなりました。私はいろいろと勝手に行動していたんですが、母が亡くなる少し前に、いろいろ間違っていたと反省して、私が自分で考えて決めて行動している様子を見て、最後はうれしいと言ってくれたんです。

廣岡 お母さんの考え方が変わったということですね。

岡田 はい、そうです、亡くなる前に変わりました。

齋藤 なるほど。いいお話ですね。ぜひ、今のようなお話が盲ろうの方の耳に届いたらいいなあと思いました。

岡田 ひきこもっている盲ろう者は、たくさんおられます。でも、親ももう高齢になって子どもの世話をするのは難しくなりますよね。だから、家にひきこもっていないで、友の会のようなみんなが集まる場に来て、人と交流しながら目覚めていくのがいいのではないのでしょうか。

「これから」への思い

齋藤 岡田さんのこれからの理想というか、この友の会自体がこうなっていったらいいなという思いは何かありますか。

岡田 理想と言いますか、何と言えはいいんでしょう、先

ほども言いました通り、こちらの建物はとても古いので立派な建物を建てたいということと、まだまだここを知らない盲ろう者さんに友の会活動を知っていただいて登録者数を増やしていきたいですね。また、NPO法人の運営や通訳・介助者の派遣が厳しいので、スムーズにできるようにしていきたいです。あと、今は滋賀県の理事長ですが、やがては全国を目指して自分をもっと高めていきたいですね。

齋藤 ぜひ。今、全国の理事の数はどのくらいですか。

岡田 全体の中で、盲ろう者は三〜四人だったかと思えます。今は理事の中に占める盲ろう者の数が少ないので、これからはもっと盲ろう者が中心になって、盲ろう者の理事が増えてきたらと思います。

あと、最後に言いたいことがあります。平成三六年に滋賀県で全国障害者スポーツ大会が開催される予定ですが、手話通訳者、要約筆記者、盲ろうの通訳・介助者の数がまだまだ足りない状況です。開催されるまでの間に少しずつ増やしたいと思いますので、みなさんのご協力をお願いします。今は、滋賀県内の通訳・介助者は二二人ですが、もっと必要です。

それと、またいつになるかわかりませんが、全国盲ろう者大会を滋賀県でやってほしいと言われた時に慌てないよ

うに、少しずつ準備をしていきたいと思っています。将来、盲ろう者としていろんな所にお話にも行かせてもらいたいと思っていますし、そういう場が広がってほしいと思いますので、またご協力のほどお願いします。

齋藤 今日は、長い時間ありがとうございました。また遊びに来ます。

岡田 またどうぞ、みなさんいらしてください。

(岡田氏のインタビューは、しが盲ろう者友の会の通訳・介助者の方々にご協力いただき、聞き手からの質問を触手話で岡田氏へ伝えていただき、岡田氏からの手話での返答を読み解いて聞き手へ返していただき、という形で進めました)